

回 顧

松 尾 正 路

文学を学問的な研究対象として勉強したことはありませんでした。たまたま自分に縁のある作者を自己流に探ってみたというだけです。いわば、めぐりあいの、きわめて不完全な書きものを小論の形で「人文研究」に書き残しました。ところどころ、その時の緊張感から生まれた、私なりにかけがえのない言葉もないわけではありませんが、表現の未熟や論理の飛躍、消化不良などが目立ち、大修正を加えなければ一本立ちのできないようなものばかりです。執筆者以外には読む人はないということだけをたよりに慰さめています。

小論の跡をたどってみますと、ルソー、スタンダール、ラ・ロシュフコー、ラ・ブリュイエール、モンテーニュ、プルーストなど、いわゆるモラリストとよばれる系列がおのずから浮びあがっているようです。モラリストは、人間の精神や心の風習を探究する思想家や作家であるという定義にしたがいますと、ルソーはモラリストの仲間からいちばん遠いようです。「私はすべてを感じる。しかし、何も見ない」とルソー自身が告白しています。これは、モラリストとよばれる知的な条件、分析や観察の能力を欠如していたということで、自己の思想に客観的な持続性を与えるためには心の鼓動が高鳴りすぎ、倫理の主張が強すぎたということになります。倫理道徳を説くのはモラリストではなく、*moralisateur* というべきでしょうが、モラルという言葉が示すように、言葉の本来の意味合いでは、またモラリストの究極的な意味においても、モラリストのなかに倫理的な要素が含まれていると考えられます。*Humaniste* の場合もおなじでしょう。サルトルを現代のモラリストとよんでも侮辱することにはなるまいと思います。ルソーはルソーなりに自己

探究をやっています。もし「コンフェシオン」がなかったら、私の青春がルソーに結びつくこともなかったでしょう。か弱い客観性よりも自己主観の誠実が人をひきつけることもあるわけです。しかし、なんととってもルソーは、世界と自己に立ち向かうモラリストの牙を持っていません。その牙とは、現実認識の知性とアイロニーです。また、ルソーの自然は倫理の形而上的な信仰や、そのリリスムの結合としてとらえられていましたが、裸の自然それ自体を、その本能や特殊性まで、真実の賛歌としてうけとる理解をもっていないませんでした。ラブレの痛快な自然でもなく、モンテーニュの知慧の自然でもありませんでした。こんな次第で、ルソーは青春の脱け殻として私のうしろに残りました。

めぐりあいのリストにパスカルが浮んでこなかった理由は簡単です。ポール・ロワイヤルはだれにとっても近づきがたいからです。モラリストとしてのパスカルは「人間が不可解な怪物であることを自ら理解するまで、私は人間に向かって反論し続ける。」という章句につきしていると私は考えました。ですから、「考える葦」にしても、人間は考えることによってますます葦にしかすぎないのだ、というふうに、反デカルト思想の表現として受け止め、通り過ぎました。

パスカルにくらべますと、ラ・ロシュフコーは、命を賭けて俗事に終始した人物ですから、「メモワール」を読んでも面白く、批評の牙が箴言という集約された形で列べられているので、注意をひく章句の前で自由に立ちどまり、手に取って即座に点検することができます。批評は、対象に明確な定義を与える認識の形だとすれば、怠け者の私には、ラ・ロシュフコーの作品ほど手頃なものはありませんでした。箴言の興味は、人間の行動はすべて自己愛に発するという作者の否定的な精神体系の原理ではなく、こういう心のムードから生まれた箇々の箴言が、それぞれどんなふうに的を射当てているかということです。精神体系は批評の骨格として不可欠なものですが、それは、作者の経験反応が重ねられ調整をうけてゆく筋道のことで、ひとつの原理と

してあるものではないと思います。この作者の「自己愛の原理」などはなくても、多くの箴言が批評の名に値いするかぎり、そこに体系の筋道はおのずから立っているものと思います。なお、箴言の抽象性は理解を妨げる物的、感覚的な障害がなく、外国人にとってもまっすぐに交流のできるものと思っていましたが、そのいくつかを日本語に訳そうとしておどろいたことは、ほとんど詩の場合とおなじように、翻訳不可能ということでした。もちろん、不可能とは相対的な意味ですが、科学と文学とでは定義の本質がまったく違っていることを改めて知りました。

定義という言葉が最初に教えてくれたのはラ・ブリュイエールでした。「作家の全精神は、よく定義し、よく描くことにある。モイゼ、ホーマー、プラトン、ヴァージル、ホラスなどが他の作家の上に抜き出ているのは、彼らの表現や描写によるものである。……」というのです。作家は *indéfinissable* (なんとも言いようのない) という言葉をつかうべきではない、というアンドレ・ジイドの言葉などといっしょに、いつの間にか座右の銘となったものです。17世紀の末期に、庶民出身の教養人として貴族社会に奉仕しなければならなかったラ・ブリュイエールは、侯爵ラ・ロシュフコーの場合とは批評の角度も違ってくるのですが、「*Les Caractères*」という書名が示しているさまざまな人物描写は抽象的な言葉の批評にとどまり、すこしも固有のイメージが浮んできません。あれほど文学上の「定義」を理解していたラ・ブリュイエールがなぜこういう失敗をしているのか、つまり、言葉によるデッサンを画家のデッサンに近づけ、さらに言葉の機能によってそれを乗り越えてゆく技法にどうして気がつかなかったかと思います。人物スケッチに関するかぎり、ラ・ブリュイエールは印象の成立ということを見捨てたようです。定義の乱用かもしれません。しかし、言葉の実質 (*substance*) をそなえた他の章句や文章は、ラ・ロシュフコーの強健素剛な文体よりもはるかにデリケートで、印象の機微をとらえ、みごとに芸術の実践家として立っています。私はモラリストのラ・ブリュイエールよりも、作家ラ・ブリュイエール

ルから多く教わったようです。

モンテーニュの八方破れの構えは、自由の場所をたずねて矛盾をおそれない人だけに可能な豊かな洞察力を生む必須の条件かと思います。モンテーニュが古典時代の構成や完結美の信仰を知らなかった時代に生きたことはフランス文学のために幸福でした。私はモンテーニュを考えることなしにシェクスピアを読むことができないほどですが、「エッセ」を貫いて次第に放つ明るさは、この著者がフランス人であるという貴重な証しであると思います。すぐれた知性が到達する本来の場所はこの肯定の明るさであり、それが知性の役割というものでしょう。モンテーニュの懐疑はところどころ影をもてあそぶ光のようにさえ見えるのですが、現実と運命の影を避けることなく征服したモンテーニュは、征服という言葉のもっとも人間的な意味を立証した人のようです。しかし、「考える」ということは、パスカルの言葉を借用しますと、それがどんなに気楽なスタイルであろうと「疲れ」ます。モンテーニュは語りすぎ、考えすぎているばかりでなく、私たちが知らないラテン語の書物にとりかこまれています。個性と自由と理解のおどろくべき近代性にもかかわらず、思想の領域に踏みとどまっている風貌は遠い過去の人です。意識と感覚の検討は何もありません。

プルーストの世界にふれて、私は、はじめて文学と真実の果汁を味い、それまでは、自分の咀嚼力で固いリンゴばかり食べてきたことがわかりました。プルーストもまたモンテーニュのように八方破れの構えをとって小説の既成概念を打破しましたが、そのことによって、モンテーニュがとり残した人間の部分を、これもモンテーニュとおなじように語りすぎ、書きすぎながら、十二分に展開してくれました。すぎたるものが天才であるならば、モンテーニュとバルザックとプルーストが同列に並ぶのではないのでしょうか。私はプルーストによってはじめて解放され、私自身を再発見したといえるようです。プルーストに関しては、「自分も書きたくなるような欲望を与えてくれる書物こそ最良の書物である。ただし、その書物のようにはなく、自分

なりに書きたくなるような書物である。それも、なにか言葉の言い現わし方などではなく、表現の方法をあたえてくれる、そして、われわれ自身の真実の方へ近づけてくれる作品である。」(モーリス・シャプラン) というにとどめておきます。

独り勝手に自尊心と効果のない反省を繰り返えしながら、そのうえ、自分でもはばかりなく読み返えず勇気さえ持てない、わずかな書きものしか残さなかった私のために「人文研究」の記念号を発刊して下さった、なつかしい同僚の皆さんのご好意には、ただ頭を下げるばかりです。謹しんでお礼申しあげます。

